

り後の成立ではあるが、この文献に引用される書名や人名がかなり均如の引くものと重なっていることを付記し、この文献の活用も重要であることを申し添えたい。¹⁰⁹ 義天録卷三に「無性釈撰論疏十四卷、神廓述」とあり。¹³¹ あるいは表員のことか？¹³⁵ 通倫『瑜伽論記』（大正四二卷）よりの引用か？¹⁴⁵ 「梁武帝御撰達磨大師碑頌」（統感一一〇卷所収）¹⁶⁵ 『華嚴一乗教分記』は三卷であるから、『教分記円通鈔』のことか？

駒澤大学国際仏教学会発表要旨

韓国仏教・禅の自然観と現代の諸問題

蔡 印 幻

韓国、ソウル、東国大学教授・文博
佛教文化研究院院長 CHAE TAEG-SU

一

古代の韓民族には共通して天を崇信し、神に祈禱する信仰があった。すなわち、日月神を信仰の対象となし、特に朝日の鮮明なる現象等の自然を崇拜する固有信仰があり、原始社会以来から自然の靈威に信服する信仰が一般的にひろく浸透していたのであった。地形的にも平野が少く山岳地帯の多い韓半島においては原始の頃から自然と山岳信仰が大きな意味をもつようになるのであるが、山岳信仰にあっては万物を包含する意味での閉鎖的世界と、そこから生まれる智慧の意味での開放的世界が同時に存在することになり、そこで開放的世界を象徴するのは多くの場合に光の源であるところの太陽であるとするところから来た信仰形態であった。このように仏教を受容する以前の固有信仰が崇天祖靈の信仰から人格神的先祖崇拜へと発展する過程の原始農耕社会において仏教が伝来されたのであった。

韓国の仏教史上において最も現実的な信仰として早くから一般に深く根をおろした仏教思想は浄土信仰思想であっ

た。そして浄土思想のなかでも韓国仏教の初期には現世とのかかわりが密接である弥勒下生浄土思想がひろまったのであった。このような浄土思想によって初期新羅仏教の基礎が築かれ、また国勢の伸長が図られたのであるが、後世における韓半島の統一と繁栄のもとをつくり東方の輪王と呼ばれた新羅真興王（五四〇～五七五）の立派な業績の背景には弥勒下生浄土信仰思想が大きな影響を与えており、その基本思想は新羅の国土に現世における仏国浄土の理想国家を建設することにあった。すなわち真興王は、「弥勒下生經」に弥勒が出世するときには、「勝伽輪聖王（Sakka）」が先に出世し世の中を平定して弥勒の下生にふさわしい国土をつくり、善き政治を行なって遂には弥勒仏に帰依し発心して出家するとあるに基づいて興国利民のための政策として、弥勒思想による転輪聖王的な政治理念を採択したのであった。これを受けて民衆もまた弥勒思想の理念が実現されることを願ったばかりではなく、弥勒出現の願いを成就させるために、各自がみずから進んで仏教の理念による理想の国土を建設せんがために努力したのであった。そして、そのような理想の世界に弥勒仏が出現するのは、經典に示められているようにたとえ56億7千万年というはかり知れない歲月の後であるとしても、新羅の人たちは不動の信念をもって自分たちの手により、この国土を仏国浄土につくりかえて弥勒の化現をかちとらしたのであった。このような背景から新羅が有縁の仏国土であるとの説が説かれるようになったばかりではなく、遂には仏国世界をあらわす仏国寺が建立され、また弥勒の出世を彷彿させるような石窟庵の仏像が造成されたことなどは、その時代における、そのような新羅の人たちの心情と真実な願望を端的に表現しているものといえる。韓国仏教の初期において、新羅の人たちは自らの住む自然や国土に対して敢えて破壊や毀損せざるは勿論のこと、かえってこの自然や国土は、まさしく弥勒の下生にふさわしい有縁の仏国浄土であるとの自負心を持ったのであった。現世に仏国浄土を建設し、ひとびとが願望する弥勒下生という理想を確実に実現させるために、新羅の人たちが自ら進んで努力することを惜しまなかった心性と思考こそは、他のいずれにおいてもみられがたい韓国仏教の初期において、韓国人の先祖たちがみせた大きな特性のある思惟方式であった

といえるものである。そしてこのことは、現在において欲望の渦巻くまに人間性を無視した土壌の上に歪んだ発展のしかたをしている現代の物質偏重の文明のさなかで、ただ目先の便利さと豊かさに惑わされて、知らず知らずのうちに、いつの間にか人類の生存がむしばまれ、おびやかされるような状況に落ち込んだなかで生活せざるを得なくなつて来た今日の人類が、謂わば増減劫のなかで、滅劫の人寿70歳に当る去聖時遥の末世といわれる時点に生きている現代の我がが、ほんとうに謙虚な気持でみならわなければならないことは、初期の韓国仏教において、弥勒下生浄土思想により戒を守り生活を浄化して、自らの住む自然と国土を仏国浄土につくりかえんとした新羅の人たちのたくましい精神ではなからうかとの思いを冒頭に申し上げながら、私の発表の主題である「韓国仏教・禅の自然観」を、現在の韓国においてくりひろげられつつある自然や国土の汚染と毀損のありさま、並びに国際的に進みつつある世界的な規模の公害など、現代の諸問題に関する見解をいささかのべさせて頂くことにしたい。

二

韓国において、初期仏教より今日に至るまでの長い仏教歴史の中で、一貫して韓国仏教思想の基盤的な精神となつて来たのは「華嚴思想」である。北方大乘仏教圏諸国の各国において、最も重視された經典が、それぞれの国の国民の気質や伝統的な思惟方法、そして風俗習慣や氣候風土等の影響によって異っているのを見ることができるのであるが、それでは韓国ではどうかと言え、それは断然『華嚴經』であると言わざるを得ない。すなわち、韓国仏教においては、各種の儀礼をはじめとしてひろくいろいろな面にわたって華嚴的な要素の占める割合はまことに大きく、寺院における一般的な日常生活に至るまで実に深く根づいており、そして一般人の習俗にまでしみわたっているほどであるからである。

新羅の世界的な高僧としてその名が知られている元曉大師（六一七～六八六）と義湘大師（六二五～七〇二）によ

って華嚴の教義が大きく宣揚されて以来、いつしか韓国人の意識の中には知らぬ間にあらゆる物事を華嚴の重重無尽にして相即相入する円融無碍的な眼目をもってとらえる思考方式が培かわれている面があり、これは華嚴思想を実践的にとらえたことで韓国仏教の一つの大きな特徴であるといえるものである。「人間の思想の造型に地理や気候風土などがどれほどの関係があるものか確かではない。だが、事実、七世紀の頃に『華嚴哲学』として知られる一つの思想体系が開花したのは極東の地においてであった。華嚴は、たがいに融通し、たがいに関連し、たがいにさまたぐることなしという考え方に基づく」といわれている通りである。仏教の伝統的な教相判釈において華嚴は大乗円教に該通する。円教というのは、あらゆるものが互いに円融しあって、少しもさまたげないという事事無碍の境地を明らかにしており、これは、おそらく現在ののような科学文明を発達せしめた欧米の思考にはないのではないかとはいわれている。鎌田茂雄先生の説を少しく引用させて頂くならば、「事法界すなわち現象界のみを見る場合は、山と川は別であり、自然と人間は別である。したがって山川等の自然と人間はつながらない。いわば事法界のままのレベルでは、山はどこまでいっても山、川は川、自然は自然であり、人は人であってみんながつながらないのである。ところが、ひとたび山に対しても、川に対しても、自然に対して人間が愛情を持ったり、また、ある意志を持ったりすると山と人が一つになっていく、人と川も一つになっていく、したがって人と自然が一つになって人間が山で、山が人間になり、人間と自然がつながってくる関係になる」と述べておられる。このように人間が万物に対して敬虔な気持がはたらき、感謝の念を持つときに、ふつうの論理や理性でも理解できる現象即本体という理事無碍の次元をも越えた事事無碍の世界が成り立つのである。こういう次元の世界というのは唯物論では到達することができない。ここでは山を征服するとか、一方的に自然を思いのままに利用するだけというような発想は生まれない。人間の心情が大きく宗教的な転換を遂げると、いまここにある自然こそはまぎれもない仏国浄土そのものであり、宇宙法界がそのまま毘盧遮那仏の全身体であることがわかる。それで韓国仏教では朝の勤行に行なわれる日常の儀礼において

も「香水海礼文」では華嚴に説くところの各世界海会の諸仏・諸菩薩を礼拝しているのであるが、そこでは、

種種の化身は、法身より流出せる毘盧遮那仏の自在応化身であり、

一切の仏刹は悉皆が毘盧遮那仏の示現する隨意受生身であり、

有感して斯現せる無隔の山河は毘盧遮那仏の相好莊嚴身であり、

一一の道場は身智が俱遊する毘盧遮那仏の弥綸正法身であり、

国土・衆生は、その業報身であり、

宇宙の虚空・大気は、その虚空身である。

したがって種種の障が滅尽すれば、種種の徳が円満なるが故に、ものみな広大に生息し光明が遍照し、これこそ華嚴世界の毘盧遮那真法身のあらわれであり、それがいまここに現前するこの世界であると讃嘆するのである。

また、韓国仏教において最も人口に膾炙されている偈頌は、『華嚴経』の第一偈として知られている「人ありて若し三世一切仏を了知せんと欲せば、応に法界の性を観ずべし、一切は唯心の造作なり。（若人欲了知、三世一切仏、応観法界性、一切唯心造）」と、この偈は毎日の朝課の始めに大梵鐘を打ち鳴らしながら鐘頌を唱える際には必ず「破地獄真言」と共に誦詠されるのである。このことは釈尊が成道せる直後に自受用の法悦に浸りながら方便をまじえずに説かれた最高の真理が華嚴であるから、極苦処である無間地獄の衆生をも済度し得るのは円融無碍の法であり、廣大無辺にして無量無尽の功徳を具有する『華嚴経』のほかになく、この華嚴こそは一日の最初に説かれるべきであり、その鐘の音が遍く法界に響き渡って鉄圍山間の五無間地獄等の三惡途におちて極苦を受けている衆生がみな華嚴を持つする功徳と修道者の願力によって離苦得樂し、究竟には正覺を成就せしめ給へとの祈願がこめられており、銅鉄製の巨大な梵鐘が打ち鳴らされることは、とりもなおさず鉄圍の無間地獄を打破することであり、人間の無明の癡暗と誤った執着を打ち破ることを象徴することであるとされている。いわば、「華嚴思想」は、我我が生きているというこ

とは全部が事事無碍法界の中で生かされているということであり、ありとあらゆるもの、すべての人、そして自然、そういうものがみな一つに通い合う世界があるということを我々に正しく教え示めてくれているのである。

韓国人は古代から自然を崇拜し、三国時代に伝来された仏教のこのような思想はすぐに素朴な古信仰と習合して山岳や自然を敬重する自然観をつくり、このような山岳や自然を重視する思想は、三国を統一した新羅、そして高麗と朝鮮に至る歴史の全時期を通じて近代までに連続と維持されて来たのであった。そのみならず、韓半島の古信仰が日本の上古の信仰と密接な関係が結ばれており、百済と新羅文化の影響を最も多く受けていた奈良の近辺からは山岳崇拜などと類似する古信仰のあとがのこっているのを見ることができるとは周知の通りである。ここにおいて注目されることは、このように古来から自然を崇拜していた韓国的な心性に仏教が入り仏教思想と習合されてからは、山岳を神秘視するというよりは国土の東西南北と、その中心には諸仏菩薩が遍満しているとの考え方が強固な信念のようになっただけということである。新羅華嚴の開祖である義湘大師が全国の主要山岳に華嚴の十刹を建立したるが如きは、まさにそのような思想のあらわれであるといえる。さらに、元曉大師が、その『発心修行章』のなかで

夫れ、諸仏諸仏が寂滅宮を莊嚴したるは、

多劫の海に欲を捨て苦行したればなり。

衆生衆生が火宅門に輪廻せるは、

三毒の煩惱を自家の財と為せばなり。

人、誰か山に歸りて道を修めんと欲せざらんや、而して進まざるは愛欲の纏う所なり、

然しながら山藪に歸りて心を修ぜざるも、

自身の力に随いて善行をば捨てざれ、

高き岳とけわしき巖は智人の居る所、

碧き松と深き谷は修行者の棲む所なり。

響を助くる巖穴を念仏の堂と為し、

哀れに鳴く鳴鳥を観心の友と為す。

と、うたっており、また古くからひろく知られている莊嚴念仏の偈頌には、

暈暈たる青山は弥陀の窟であり、

茫茫たる滄海は寂滅の宮である。

物を拈じ来りて罍碍することなし、

松亭の鶴頭が紅いなるを幾たび看しや。

と、うたわれているのを見につけても、韓国の仏教者たちの山岳に対する態度や自然観がよくあらわれていると思われるのである。

新羅の末期から高麗の初期頃（八二一〜九三二）にかけて韓半島に禅が伝来されて九山禅門が成立してからは、韓国の仏教は禅思想が最も大きな比重を占めるようになった。高麗時代（九一八〜一三七四）に七宗に分立していた仏教が、朝鮮時代（一三九三〜一九一〇）の初期には合併を強いられて禅宗と教宗にわかれ、やがて禅を中心とする仏教になって現代までに至っているのであるが、禅では、「ありとあらゆる生き物には仏性がそなわっている」「仏性は草や木、山や河、そして大きくは全宇宙、小さくは一微塵にいたるまで及んでおり、ありのままのすがたをもっている、一つとして無駄に存在しているものはない」「心と仏と衆生、是の三に差別は無い」という各經典にあらわれている仏教の思想をふまえて出された「天地と我と同根、万物と我と一体」であるとの物我一如の思想並びに自然観を持っており、そこには、現象の世界とか、相対の世界とか、本体の世界だとかいうような区別が皆なくなつて、「一念をも生ぜざるを即ち名づけて仏となす」の境地に入り、その無心に徹した上に百尺の竿頭に一步を進めて絶し、絶後

に再び蘇えり来った処には自己がなく、有るものは外界の他物だけである。したがって、「人間が物と成り切つて生きる」のであるから、ここにはすでに、物をもてあそんだり、また、物を利用するだけのものとして見るようなことは、ありえなくなる。そこにおいては、天地間の森羅万象と自然、それこそ、ありとあらゆるものが皆な悉く仏の顯現なのである。そして、それがみな仏のあらわれであることを心理的に理解するというだけのことでなく、これを實際に把握し、体得して、それを日常生活の行住坐臥するところにおいて実行することに根本を据えている。故に、中国の禪を大いに興隆せしめ、また、韓国の曹溪禪の源流であるといわれている六祖慧能大師は、

諸人の自己の心がそのまま仏である。いささかなりとも疑うべからず。外に一物も無くとも、また能く建立するは皆な一つの心が多くの法をつくりたすからであり、故に經にも、「心が生ずれば種種の法が生じ、心が滅すれば種種の法も滅する」とある。されば、「浄土を得んとするならば、まさに、その心を浄くせよ。その心が浄ければ、則ち仏土も浄からん」あるが如く、迷える人は、仏を念じて彼土に生ぜんとするも、悟れる者は、自ら其の心を浄くするなれば、すなわち、自性が弥陀であり、唯心が浄土である

と喝破されているところの唯心浄土觀が禪では基本的に認識されている。高麗の後期頃から現在に至るまで韓国の禪堂で最もよく読まれている高峰原妙禪師（一二三八～一二九五）の『禪要』には、「山河大地、万象森羅、有情と無情が悉く皆な成仏す」とあり、また、同じく大慧宗杲禪師（一〇八八～一一六三）の語録の一つである『書狀』には、「性命の絶するとき、則ち十方世界がすべて是れ当人の安身立命の処なり……過去・現在・未来の諸仏が尽く徑山の拄杖に在つて同時に大光明を放ち十方世界を照らすを直に得たり、山河大地万象森羅が一時に稽首することを」と述べられている。この大慧の語録によって大きく啓発されたといわれる高麗の普照國師（一一五八～一二一〇）は、『真心直説』のなかで、「一雙の正眼あれば、尽くの大地は是れ箇の伽藍なり、悟理の人の安身立命の処なり。既に真心を達すれば、四生と六道が一時に消殞し、山河大地が悉く是れ真心なり……即ち、十方世界が唯一真心なれば、全

身にで受用すべきなり」と明しており、その法嗣である真覺國師（一一七八～一二三四）は、『語録』に「看よ看よ、万象と森羅が、只に此の一身に常に独露するを」と吐露しておられる。若し人ありて、心情に宗教的な一大転換を体験し、さらに進んでその境地にも安住せず停滯せざる時には、まさしく全世界は自己にはかならない。ここにおいて万法は一心にあり、一心は万法となる。そして山川草木、山河大地、宇宙世界もまた心でつくり出されたものである。まさに山河大地と自然と我が心が一体となることこそが仏法である。そこには少しでも比較し分別することをまじえてはいけなしいし、思量し差別することを入れてはならない。思量し分別すると途端に心と仏と衆生がみな別別になり、心と物と山河大地、そして自然が異なるものになり、浄土と地獄が分かれて六途の輪廻がはじまり、終りがなくなる。それで、朝鮮の清虛休靜禪師（一五二〇～一六〇四）は、『禪家龜鑑』の末尾に、「神光は昭昭靈靈として昧からず、万古に生滅せざる微き歟である。此の門に入りては、知解を存つなかれ」と結論している。

このように、韓国では古来より、そして仏教思想を通じて自然との一体感を培い伝えて韓国人特有の自然觀ともいうべきものをたしかに形成して来たのである。ところで、近代になってヨーロッパから起つた科学文明の発達にともない、いわゆる先進の諸国においても、並びにそれらを懸念に取り入れた韓国においても今日のわれわれは大きな便利さと物質の豊さに恵まれているといえるであろう。しかし、その物質文明と、その精神文化の大変な成果にもかかわらず、そのかげに今や人間にとって最も大切なもの、即ち、仏教の心とも言ふべきものが失われまいつつあるようである。世界的に見るならば、現代の地球上には絶え間なくどこかで局地的ながらも戦争が起り続いているばかりではなく、何か一つでもまかり間違えば、直に第三次の世界戦争が起つて人類全体をそれこそ破滅のどんぞこに突き落しかねないことに怯えなければならぬ時代であり、また、地球をめぐる世界的な規模でひろがりつつある自然の汚染や破壊から起る国際的な公害は、もう見捨てることのできないほどに深刻な事態となっている。その一方で、韓国もやはり一生懸命に経済と科学の発展のために努力したおかげで、顕著な発展を遂げたけれども、先進の諸国に追い

つこうとするあまりに、先進のヨーロッパでは何百年もかけて成したのを、韓国ではわずか何十年の間に、また、日本で何十年もかかったことを、ほんの何年間で成し遂げるといふ目覚ましい発展ぶりを見せて来たものの、そのかわりに、かえっていろんなひずみが公害というかたちで、ひとまわりも大きく、そして急速な早さでわき上っており、できうるならば、避けなければならない先進国の悪しき前轍を、まるでその通りを例外もなくかけ足で踏み進んでいるような恰好になっている。

韓国が不運な戦争の破壊のあとを乗り越えて、その間においてたしかに急速な発展をつくり上げて来たけれども、しかし、はたしてどれだけほんとうに人間らしい人生を、そして住みよい社会というものをかち得たのであろうかと、今、此処で、目前にくりひろげられつつある各地の自然破壊や、特にもっとひどくなっていくばかりの各種の都市公害の深刻さを身をもって経験しながら憂慮せざるを得ないというのが心ある多くの市民たちの等しき心情である。

今日の世界が、そしてまた各国が、それなりにかかえている現代の諸問題は、おそらく大同小異ではなからうかと思われるのであるが、その中でも、先ず、韓国に起っている公害という現代の諸問題と、そして韓国もやはりかわりあわなければならない国際的な公害に関する問題を考察して見ることにしたい。

三

毎年の六月五日は、「世界環境の日」としてUNにおいて決議された日であり、一九九二年の今年は、その二〇回目に当るといふ、そもそも世界環境の日なるものができたのは、一九七二年の六月二日から一六日までの間に、スウェーデンのストックホルムにおいて一一三箇国の代表が集って人間環境会議を開き、UNの人間環境宣言を通じて世界環境の日を定めること、UN環境機構を創設すること等を提案したことによって、その年の第二七次UN総会で、人

間環境会議が開催された六月五日が、「世界環境の日」に定められたとのことである。韓国でも、この時に代表を送って決議と宣言に参加しており、またそれよりも遡って一九六三年には、すでに環境立法の根本である、環境保全法、廃棄物管理法、海洋汚染防止法等の公害防止に関する法律が公布されているのであるけれども、それでは関係法が制定されて二六年後の今日の韓国において、また、UNの人間環境宣言が発表され、世界環境の日が定められて一七年を経過した現在の世界における自然や人間環境の実態は果して如何なのであろうか。

先ず、韓国における環境汚染の今日的な実情について、韓国環境技術研究所の尹所長は「韓国の大都市における大気汚染度は、まことに深刻な状態である。韓国の人口密度は、一平方km当り四〇・八・五人であるけれども、都市集中化の現象がますます進んでおり、ソウル・釜山・大邱・仁川等の四十都市における人口密度は、一平方km当り九・七六五人という深化ぶりを見せている上に、産業施設の集中化によって大都市と産業公団地域の環境汚染は非常に深刻な状態である」と指摘している。これに加えて、大規模の工業団地が造成されている地域の住民たちは、公害に蝕まれながら血液中の重金属含有量が年毎に高くなっているとのことである。韓国の環境庁が一九八〇年度からはじめた蔚山などの代表的な七大工業団地付近の住民たちに対する健康度調査実施の資料によれば、蔚山地域では、八〇年度に二〇〇名を対象に実施した時は、血液中の鉛の濃度が平均〇・一PPMであったのが、八八年度における四七九名からは、平均〇・二四三PPMが検出され、八年間に、二・四三倍も増加されておる。また、カドミウムの場合には、八〇年度に、平均〇・〇〇七PPMであったのが、八六年度は、平均〇・〇一一PPMであり、六年間に、一・六倍が増加したという。そして、麗川工団地域住民の場合、八一年度に、呼吸器・循環器・神経障害等の疾病症状の呼訴率が、一六・二%から、八八年度には、三九・四%となり、八一年度に比べて二・四倍に増している。周知の如く、鉛は、交通機関の排気ガス、精錬所、熔接、蓄電池の製造等において多く排出される重金属であり、呼吸器を通じて骨格に蓄積され、骨を弱くし、重症の場合は中枢神経の麻痺を来たすものである。また、カドミウムは、鍍金や熔接、

殺虫剤、半導体製造等に多く利用されており、人体に永らく蓄積されると、肺気腫になったり、骨の構造までも変化させるといふおそろしい重金属であり、鉛は、〇・五PPM以上、カドミウムは、〇・二PPM以上が人体に蓄積されると中毒症状があらわれるとのことである。これらは、各種の大気汚染による原因と、汚染された魚介類等の動植物を摂取することによる間接原因が大きいものと分析されている。さらに、これに関連する今一つの問題は、各企業の環境投資に対する姿勢である。すなわち、過去一〇年間に工場汚染防止設備のために投資した費用が工場施設投資に比べて、〇・四％に過ぎず、したがって企業による環境保全施設のための投資のGNP対比は、〇・〇三〇・〇四％であり、先進工業国における〇・五〇二・〇％に比べて著しく劣っている点であるといわれている。

このほかに、韓国の山河や大地が、あまりにも韓国的な様相に由って汚染されているという問題がある。その代表的な例として、巨大都市の一つに数えられるソウル市の食水源である八堂ダム上水源に注いでいる上流河川の水質汚染である。この市民の上水源の上流を汚しているのは、工場の廃水、牧場の排泄汚水、大型ホテルの生活污水、そして、ゴルフ場で農薬管理法によって使用禁止になっている各種の猛毒性農薬が大量に撒布されたのが、そのまま市民の食水源に流れ込んでおり、告発によって検察庁が乗り出して調べたところ、八七年から八九年の夏まで上流にある五箇所のゴルフ場に撒布された猛毒性農薬の総量は帳簿に記録されている数字だけでも一三・九五九kgに達していたというのであるから市民は殆んど毒薬に近い水を浄水池を通して何も知らずに水道から飲んでいたわけである。このように、水も土地も空気も汚染されているばかりではなく、かつては、崇拜の対象でさえあった山までも例外ではなくなっている。近來になって登山する人たちの数が急激に増えるにつれて山岳の貴重さが薄くなり失なわれつつある。国立公園管理公団の推計によれば、今年に山に登った人たちの総数は、三千五百万人に至るとの事であるから、老弱者を除く国民の全体が山を尋ねたという話になるわけである。八〇年度の七百万人に比べれば、五倍が増えている。登山人口が増えれば増えるほど山が汚染される事例と度合が増えている。山に捨てられた汚物が今年だけでも一

万九千余トン程であり、汚物の年平均増加率は、一七・三％であるというのである。此の頃、心ある人たちが山に對する国民の認識が新にされなければならないとの憂慮の声がしきりに出されている。すなわち、山は、今の我々たちだけが利用してしまうような消耗品とは断じて異なるものである。山こそは子孫孫の万代の後まで貴重に遣して行かなければない最上の遺産である。であるからこそ、我々の代においてなさなければならない最少限度の事として、先祖たちから受け継いだ状態ぐらいだけでも我等の後代にそのままに遺してやるべき責務を負うべきであるというのである。今や我等の先人たちが山岳を崇拜し、また大自然こそ、そのまま宇宙法界身である毘盧遮那仏の全身体のあらわれであると信じ、全世界は、まさしく自己にはかならないとの眼目をもって、此の山河大地をこの手で弥勒仏が下生するにふさわしい仏国浄土につくりかえんとした心意気を今日のわれわれは容易く聞きのがしではならないと思うのである。

このように我等人間が直接に山河や大地を汚染させ破壊している場合もあるが、同時に文明の発展、生活の向上に伴いて知らぬ間に心ならずも、つくりたすことになった場合も多い。

フロンガスや炭酸ガス増加による地球温室化から来る地球規模の自然破壊に関する問題、或はまた、知りながらも、やめることができずに国際間にかかりあう難問題として惹き起されている酸性雨の問題、そして輸入穀物・果実の農薬汚染や我等が日常において食べたり、着たり、塗ったり、使ったりしている各種の食品・衣類・化粧品・用器等に含有されている人体に有害な発癌物質の問題、輸入の煙草に有毒性の殺虫剤が残有することによる発癌問題、成長促進ホルモンや抗菌性物質等の薬物を与えた牛肉に對する輸入規制の問題、食品に使用するために輸入された非食用牛脂の有害性の問題等によって関係各国の間に深刻な攻防戦が熾烈な折柄、韓国でもこれらの国際的な諸問題とかかわり取り組まざるを得なくなっている。

これらの現代における世界的な諸問題のなかでも最近になって急速に浮上して來たのが、地球上の全人類にかかわ

りあいのあることとして、全世界的に関心がもたれ、話題となり、至急に適切な解決方法が取られなければならないという問題は、フロンガスによる地球上を取り巻いているオゾン層の破壊である。

オゾン層とは地上一二—一五kmの成層圏にある厚さ三mm程度のオゾンによって成る極く薄い層のことである。この層が実は太陽や宇宙から放射されるところの人体に有害な紫外線、或は放射線等を防いでくれる役割を果しているのであるが、このオゾン層が近來とみに地上において使用が増加している冷蔵庫の冷媒・スプレイ噴射剤・エアゾール・洗浄剤・発泡プラスチック等に使われているCFC（沸素化塩化炭素化合物、一名 プレオンガス）と、ハロン（Halon：消火剤に使用）等によって漸次に破壊されつつあり、遂に南極上空にはオゾン層に穴があきはじめているというのが今日の状況であるという。科学者の指摘によると、塩素原子の一つが数万箇のオゾン分子を破壊して百年以上もオゾン層に残留するというのである。このために去る八七年にはアメリカをはじめとする世界の二四か国がカナダのモントリオールにて会合を開き地球上に住む人類や生物類の生存に甚深なる役割をはたしているオゾン層を減少させる物質に対する議定書を締結しており、これへの加入国は先ずCFCの生産と消費をこの先き八六年の生産水準に凍結させると共に九八年までには五〇%に減縮し、窮極的には使用を禁止することになっている。現在における全世界のCFC生産量は、アメリカが全体の三五%、EC加入国が四〇%、ロシアが一二%、日本が一〇%を占めているといわれており、韓国における国内の一人当りCFC使用量は〇・五kgであり、モントリオールの議定書に定められた使用上限線に到達しているとのことである。（韓国社団法人 環境保全協会が主催して一九八九年八月二四日に行なわれた「地球オゾン層保護のための公開討論会」における中央大学の李相敦博士の発表による）アメリカと日本はすでに代替物質の開発に成功して試験中であると聞いている。韓国においても韓国科学技術研究院がCFC代替品の開発に取り組んでおり、九三年に生産し使用することをめどにしていることであり、大自然と人類生物を保護するためには、さらなる公害を起さないような代替物質の開発は火急を要することの一つであるといえよう。

さらに今後において、世界的にも、また韓国にとっても、もっと深刻化されることが予想されるのが大気汚染問題である。すなわち、空気が汚染されて空気中の水素イオン濃度が基準値を越えて一〇倍以上になると、雨が酸性化するのであるが、これがいわゆる酸性雨というものである。韓国においても、今年の二月に、釜山と大邱地方に、PH四・四—四・六という酸性の強い雨が降った。水素イオン濃度をあらわすPHは、その数の1が下れば下るほどに濃度は、一〇倍、一〇〇倍と強くなるという。このような酸性雨が地球上に出現したのは一九五〇年度の頃からであり、北ヨーロッパで山林や湖水が死滅したことが酸性雨のためであったと判明されたのであった。この酸性雨は、植物を枯死せしめるばかりではなく、鉄や岩石、そしてセメントまでも使いものにならないほどに腐食させる恐ろしい破壊力を発揮するといわれるのである。しかるに、この酸性雨は、自動車や工場から排出する煤煙がその元兇となっているのであるから、つまり、水・土・空気などを汚染させる有害物質はみな人間の手によってつくられているということである。すなわち、産業という名で、開発という名で、または文化という名によって、人間は現代において自身たちの生存環境を破壊しておりながらも大部分の人たちは、そのことに対する情報を全然、知らずにいるか、或は、それほど大変なこととは思わずにいるかであるといえる。人間が産業用のエネルギーとして使用している化石燃料は空気を汚染させるだけではなく、大空中に熱を蓄積するという実に恐ろしいことまでも同時に進行させているのである。大空中に熱が蓄積されて大気の温度が上昇すると、そこには気象に異変が生ずるからである。すなわち、旱魃や暴雨、それに台風等の予測することのできない異状気象が発生して地球の表面にそれこそ大異変を引き起すようになるのである。このような事実は、先頃に、北極大気圏のオゾン層が破壊されて地球表面の気温が上昇しているという発表があつて以来は、しばしばそのような気象の異変を見ているわけである。若し、大気の温度が、摂氏一度ほどでも上るならば、北極の氷山が解けることになり、その結果として地球の表面は海水に浸される破目になるであろうと言われている。人間は、緑地の木を伐り開墾することを文明の発達につながるものと心得ているようであるけれど

も、しかしながら、地球上の緑地帯が減少すれば、それだけ酸素の生産源が減少するという自明なることを考えずに行動を取っているわけであるから、これは、恰も人間たちが今や生死の境い目に立って曲芸を演じているようなものである。このような自然汚染の問題は、殊更に言うまでもなく、韓国だけの地域的な問題に非ず、全世界にわたる問題であるが故に全世界が共に智慧をしぼり合って解決すべく努力しなければならないことは勿論であるけれども、最も肝心な事は、韓国は韓国なりに、何よりも先に韓国の自然や国土を汚染と破壊から救い出すための必死的な努力を傾けなければならないと言わざるを得ない。なぜならば、世界の各国が、みな拳って同じく自国から汚染を追放し、破壊から脱け出すために良識を動員して智慧ある行動を取り、人間生存のためのよりよき環境づくりに励むならば、世界は一時に再び清浄な世界となることは疑う余地のないことであるからである。

仏教の『円覚経』に曰く、「一切実相の性は、清浄なるが故に一身清浄なり、一身清浄の故に多身清浄なり。多身清浄の故に、是の如く乃至十方の衆生円覚清浄なりと、善男子よ一世界清浄の故に多世界清浄なり、多世界清浄の故に、是の如く乃至虚空を尽し、円かに三世を褰み、一切平等清浄不動なり」と、示めされている。

四

韓国では、一九八九年の一月に、すぐにせまりくる二一世紀への展望に関する講演と、そして討論や対話を開くために、一人のノーベル賞受賞者をソウルに招いて、「ノーベル賞受賞者韓国フォーラム」が開かれた。ノーベル賞を受賞した世界的な大碩学たちが来韓して、「二一世紀への展望」をテーマに、いろんな分野に関して叡知の溢れる講演を行い、情熱のこもった討論を繰りひろげたばかりでなく、世界的な技術と生産を誇る浦項製鉄所が経営する浦項工科大学の大講堂において一月の一日から二日にかけて、歴代のノーベル受賞者八人と、韓国の中・高・大学生たち一千余名が参加して開かれた「ノーベル受賞者に問う」と銘打った対話形式の討論会では、科学技術者は自身の

研究結果に対してどれだけの責任を取るべきか、また、未来の科学は、いかようにあるべきかなど、二一世紀の科学界が直面せざるをえない全般的な問題をもって学生たちが質問し、受賞者たちが答えるという形式で真摯な対話討論が行なわれて多数の学生たちに深い感銘を与えた。そのなかから、この発表内容と関連づけられるような質疑応答をいくつか引用して見ることにしたい。「科学技術は、人類の幸福を増進させることに寄与もするけれど、人類に否定的な影響を与えることもまた事実である。科学者たちの社会的な責任は何んであるとお考えでしょうか」この質問に対して八〇年度の化学賞の受賞者である米国の五八才、ウォルター・ギルバート博士は、「知識は、危険であることもあり得る。しかしながら、また科学は最も自由でなければならない故に、人間の思考を抑圧するものに対しては、対抗し得る分野でなければならない」として、自由な研究を強調し、社会に対する責任は付随的な問題であると答えた。しかし、超伝導体研究によって七三年度の物理学賞を受賞した英国の四九才、ティビット・ジョセフソン博士は、「科学技術が本質的には悪いものではないけれども、使用する人たちが悪魔の心を抱くならば、それは人類を破壊させるための悪魔の武器になるであろう」と、であるからして、「科学者たちが、科学を真理探求のための対象としてのみ把握しようとする場合には、賛成しかねることであり、或る研究を行おうとする時には必ずその研究が人類に寄与するものであるかを念頭におくべきである」と慎重論を述べている。また、礬素化合物の研究によって、七九年度の化学賞を受賞した米国の七七才、ハバート・C・ブラウン博士は、「科学技術は、飢饉や疫病から人類を救っており、これからも人類の発展に肯定的な役割を果すであろう」と前提してから、「科学者は、研究それ自体に没頭すればよいのであって、その活用の如何は社会全体が責任を持つべきである」として、社会の役割を強調する構造機能的な立場を見ている。そして、素粒子の研究によって、七六年度の物理学賞を受賞した米国の五八才、バートン・リヒター博士と、同じく素粒子研究では世界的な権威者であり、七九年度の物理学賞を受賞した米国の五七才、セルタン・リー・クラシヨウ博士は、共に、「真理を追求する姿勢そのものがすでに人類発展に直結するものである」と

し、「如何に善用するかは、その社会の構成員たちの能力に左右される」として、科学技術開発に対する樂觀論を披歴した。しかし、この意見に対して、ジョセフソン博士は、「どうして科学を無条件的によいものであるとばかり言えるであろうか」と反問しながら、「科学も個別的に見るならば、原子力のように大変に優秀な道具の發明でありながらも、人類に必らずしも幸福だけをもたらしてはくれなかった」と反論を展開させている。このほかに、「AIDSと癌は、いつごろ征服することができようか」との問いに対して、ギルバート博士は、「断定して言えることではないが、二〇年程は待たなければならぬだろう」と簡単に答えた。また、未来の頭脳研究の方向についての質問に対して、表皮成長因子の発見によって八六年度の医学・生理学賞を受賞したイタリアの八〇才、リター・レビ・モンタルチニ博士は、「物理・数学・生化学等の隣接学問と連携して、頭脳メカニズムの問題が解決されて行くことになる」と展望した。この討論会の進行は、「水平的思考」で世界的に有名な碩学、エドワード・トブノ博士が受持った。以上の引用は、対話討論の極く一部に過ぎぬものであるけれども、しかし、これによっても、現代の科学文明社会の旗手であり、技術研究の最尖端を行く学者たちの片言隻語のなかからもやはり科学文明の使用の与否は社会全体の責任であり、その社会を動かす人間の心のありかたにありとする考えの一端をかいま見ることができると思われる。

五

さて、私は、この発表の最後の総結論として、私が常日頃からその禅思想に私淑しており、東洋の仏教・禅思想を西洋の社会に正しく知らせ、ひろめることに力を尽して、西洋の物質偏重の思考方式を禅の眼目をもって文明を批評された鈴木大拙先生が一九五八年のブラッセル万国博覧会で読まれた世界人に送る禅者のメッセージの一部を、ここに改めて皆様方と共に読み返えして、よくかみしめながら、現代の世界に、そして、そこに住んでいる今日の我々に

とって、失なわれていたものは何であったのか、何に目覚めるべきであるのか、その声をじかに聞いて、はっきり認識する必要があると思われる。世界を、自然を清浄にするには、人間の心が清浄であらねばならない。

地において倒れた者は、地によって立ち上るべきである。人間による汚染は、やはり、人間の精神と頭と手によって浄化されなければならないと思うからである。

即ち曰く「いまだかつて、人類の歴史において、現代の世界におけるほど、精神の指導者ならびに精神的価値の高揚が差し迫って必要だったことはない。前世紀から今世紀にかけて、われわれは、人類の福祉の増進のために幾多の輝やかなしい成果をおさめて来た。しかし、おかしなことに、われわれは、人類の福祉が主として精神上の智慧と訓練によるものであることを忘れていたようである。今日、世界が憎しみと暴力、恐怖と不実の腐敗した空気に満たされているのは、ひとえに、われわれがこのことを充分に認識しなかったことによる。実際、われわれは、個人としてのみでなく、国際的にも、また民族的にも、おたがいの破滅のために、いよいよ力をつくそうとしているかの如くである。

今日、われわれの考え得る、そして、その実現をねがうさまざまな精神的価値のうち、何よりも切望せられるものは「愛（慈悲の精神）」である。

生命を創造するのは愛である。愛なくしては、生命は、おのれを保持することができない。今日の、憎悪と恐怖の、汚れた、息のつまるような雰囲気は、慈しみと四海同胞の精神の欠除によってもたらされたものと、自分は確信する。この息苦しさは、人間社会というものが複雑遠大この上ない相互依存の網の目である、という事実の無自覚から起きていることは、言をまたない。……中略

終りにあたり、くりかえして言う。存在するものすべての相依相関の真理に目覚め、たがいに協力する時、はじめてわれわれは栄えるのだという事実を、まず自覚しようではないか。そして、力と征服の考えは死して、一切を抱擁

し、一切を許す愛の永遠の創造によりみがえらうではないか。愛は、実在があるがままに正しく見ることから流れ出る。そこで、われわれに次のことを教えてくれるのも、また愛である。すなわち、われわれ——個別的に言えばわれわれのひとりひとり、集合的に言えばわれわれのすべて——は、善にあれ、悪にあれ、この人間社会に行なわれることの一切に責任がある。だから、われわれは、人類の福祉と智慧の全体的発展を妨げるような条件を、ことごとく改善もしくは除去するように努めなければならないのである。」と。

みなさんこの大獅子吼に世界の人類は熱心に耳を、そして心を傾けるべきではなからうか。

このたび、駒沢大学において、このような意義ある国際的な仏教学会を開催され、世界的にも時宜に適うテーマを選ばれた事に深い敬意を表すると共に、このたびの成果が、池中に落とす一適となって、その波紋がひろく世界中にひろがることを切に望んで止みません。

韓国における葬墓制について

金 永 晃（禪晃）

はじめに

韓国人にとって墓地というのは、祖先崇拜を意味するといっても言い過ぎではない。封墳式墳墓形態は韓国の墓の特色であり、伝統的な風水地理説を採り入れた習わしである。もし、他人の所有林野といっても一旦墓地が造られれば、刑事上、民法上、法律の保護の下に置かれて、他人の墓地をかってに毀損することはできないのが社会的慣習である。全国土面積九万八、九百二km²に散在している既存墓地は、一九七八年保健社会部で実施した墓地実態調査を根拠として、一九八六年全国に造成された墓地を推定して見ると、およそ、一八、五八四、〇〇〇基である。その中、子孫がなくなっている無縁墓地がおよそ七〇〇万基であると報告されている。これは一九七八年以来、毎年約二二万五、〇〇〇基程度が増加したことになるが、土地の用途に関係なく全国土面積一ヘクタール当り約二基の割り当てである。特にソウル周辺の場合、全国の総墳墓数の約二七・七％を占めているので、面積と比較すれば一ha当り約四・四基に当たる。都市地域を除外すれば一ヘクタール当り約一・七基であるということになる。それがまた、半永久性